

ブリガム・ヤング大管長： 最後の10年間

年表 年代	重要な出来事
1867	エライザ・R・スノー、扶助協会の再設立の許可を受ける
1867	教会日曜学校連盟発足
1869	青年女子俟約協会発足
1872	『ウーマンズ・エクスポネント』発刊
1875	青年男子相互発達協会設立
1875	ブリガム・ヤング・アカデミーがプロボで開設される
1876	アリゾナのリトルコロラド川沿いに最初の入植団が定着する
1876	メキシコにおける伝道活動開始
1877.4.6	セントジョージ神殿奉献
1877	ブリガム・ヤング、ステークにおける神権指導者組織の改革を指示する
1877.8.29	ブリガム・ヤング死去
1878	ユタ州ファーマントンにおいて最初の初等協会が組織される

1847年にグレートベースンに到着して以来、聖徒たちは、神学、科学、読み書きの能力向上のために数多くの勉強グループを組織した。しかし、これらのグループは短期間で解散した。ブリガム・ヤングは生涯最後の10年間に、神の靈感により、次の世紀を生きる聖徒たちの必要に対応するため、教会の補助組織を確立した。またアリゾナ北部への入植、教会の神権指導者組織の改革、セントジョージ神殿の建築と奉献、ブリガム・ヤング・アカデミーの設立などに見られるように、シオンの領域を広げ、教会員の靈性を高めるために力を注いだ。

補助組織の発展

以前に触れたように、教会で最初に設立され、教会の中央指導者から常に導きと励ましを受けた補助組織は扶助協会であった。末日聖徒の姉妹たちはデゼレトに到着して以来、自分たちのなすべき仕事と慈善奉仕について、ノーブーの扶助協会集会で預言者ジョセフ・スミスから教えられた理想を実践に移していた。1858年の時点で、活動を行っていた扶助協会はソルトレーク・シティー内で10のワード、そのほかにオグデン、プロボ、スパニッシュフォーク、ニーフアイにも存在した。しかしこの年にジョナサン軍の軍隊が進攻して来たことによって、聖徒たちは南部への移動を余儀なくされたため、扶助協会の活動は中断された。

1867年12月、ブリガム・ヤング大管長はソルトレーク・シティーで扶助協会を再び組織することを承認し、エライザ・R・スノーがこの任を受けた。その後の2年間に預言者は扶助協会のプログラムを正式に承認し、またすべての監督に対して、スノー姉妹と二人の副会長ジーナ・ディアンサ・ハンティントン・ヤングならびにエリザベス・アン・ホイットニーが扶助協会の支部組織設立のために準州内を巡回して、ワードを訪問する際に協力するよう指示を出した。各定住地に住む女性たちは月に2回開かれる扶助協会に出席するために数キロの道のりを馬車や馬、ろば、時には徒歩で通った。毎月2回の集会のうち1回は、裁縫と貧しい人々の世話をするために、残る1回は教育と靈的なテーマに基づいた勉強、また証会に充てられた。

ブリガム・ヤングは晩年、扶助協会に対して幾つかの特別な「使命」を与えている。1873年にヤング大管長はすべての扶助協会会長に対して、3人の若い女性を指名して衛生学と看護学を勉強させるよう指示している。また1875年にヤング大管長はジーナ・ヤングに対してすべての定住地の女性を養蚕事業（蚕の飼育と絹の生産）に従事させ、この事業を定着させるよう指示した。この「絹中心主義」は長年、教会の姉妹たちの間で中心的な活動となった。日常生活で使用する衣類、神殿と教会の集会所で使用する衣裳を作るために必要な絹の生産に従事したのである。預言者は1876年、エメリン・B・ウエルズに対して、穀物の節約運動を女性の間で展開させ

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

る責任を与えている。緊急時に備えるため小麦を備蓄したのである。ヤング大管長はまた姉妹たちに対して、教会の消費組合事業と共同制度で築いたあらゆる家内産業を支援し、従事するよう常に奨励した。

扶助協会の活動に熱心に参加していた姉妹たちは、女性のための新聞を発刊する事業にも乗り出している。ルイーザ・ルラ・グリーン・リチャーズを初代編集長とする隔週紙『ウーマンズ・エクスポネント』(*Woman's Exponent*) が1872年にスタートした。「この新聞の目的は女性にとって興味と価値があるあらゆるテーマを採り上げることです。記事の内容は、広い範囲にわたる、全国と地方の最新のニュースを短くまとめた解説、家事にまつわる様々な事柄の心得、教養、健康と服装に関する記事、通信欄、人々の関心を集めている話題に関する論説、その他様々な読み物などで構成されることになるでしょう。」¹ 『ウーマンズ・エクスポネント』はあらゆる定住地の姉妹たちが様々な目標に向かって結束するうえで大いに力を発揮した。

ヤング大管長は他界する1か月前の1877年7月に最後の組織開発を実施している。エライザ・R・スノーを伴ってオグデンへ赴き、最初のステーキ扶助協会を組織した。会長に召されたのはフランクリン・D・リチャーズ長老の妻ジェーン・S・リチャーズだった。当時の聖徒たちは、ステーキ単位で組織されることを予期していなかったため、ステーキ扶助協会の設立には男女とも一様に驚き、そしてその驚きはやがて喜びに変わった。『ウーマンズ・エクスポネント』はその日を歓喜の日と論評している。²

初期の扶助協会は個人の家で開かれることが多かったが、定住地の兄弟たちの助けによって扶助協会専用の集会所が建てられた。扶助協会の消費組合の売店はこの集会所の地下に設けられることが多かった。

恒久的な組織形態を整えた2番目の補助組織は日曜学校である。日曜学校という概念は1780年英国諸島のプロテスタントの間で起こり、1790年ごろには早くも合衆国



「ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載、ユタ州ソルトレーク・シティ

シール・バン・シッケルが描いたブリガム・ヤングの肖像画。ブリガムは右手に『主の律法』(*Law of the Lord*) と題する書物を持っている。テーブルの上は『モルモン書』と『聖書』。

ユタ州オグデンのウィーバーステーク扶助協会の建物。この建物は1902年に完成した。1926年に「ユタの開拓者の娘たち」組織に譲渡され、ウィーバー郡開拓者ホールと呼ばれた。現在は開拓者関連の物品を展示する博物館として使用されている。

ジェーン・スナイダー・リチャーズはブリガム・ヤングにより、ウィーバーステーク扶助協会の初代会長に召され、同職を31年間務めた。リチャーズ姉妹はウィーバーステーク扶助協会の建物が1902年7月19日に奉献された際、奉献式の司会を務めた。



「ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載、ユタ州オグデン

時満ちる時代の教会歴史



リチャード・バラントイン（1817 - 1898年）はスコットランドで生まれ育ち、青年時代に改革派教会の日曜学校教師を務めた。25歳のときに、バプテスマを受けて当教会の会員となった。リチャードは母親とともに1843年ノーブーへ移住した。

リチャードはなぜそれほどまでに日曜学校に熱心なのかと尋ねられたとき、次のように答えた。「わたしは幼いころに、御霊の声によってこの仕事に召されました。わたしは生まれる前から、教会に入る前から、この仕事に聖任されていたと何度も感じたことがあります。わたしは若人のために働くようにとの靈感を受けました。」³ 1852年、バラントイン兄弟はインドへ伝道に召され、約3年間伝道を行った。

教会と補助組織の発展に伴い、伝達事項を徹底する必要性が高まってきた。1866年、ジョージ・Q・キャノンらは日曜学校のために『ジュブナイル・インストラクター』を個人的な資格で編集出版した。後にこの機関誌はデゼレト日曜学校連盟によって出版されることになる。1866年から1929年までは『ジュブナイル・インストラクター』、1930年から1970年までは『インストラクター』と呼ばれた。

に伝えられた。アメリカ日曜学校連盟が結成されたのは1824年である。一般的に日曜学校は国民教育制度の前身または併設機関として位置づけられており、若き「学者たち」に対して読書力をつける訓練と、『聖書』からのテーマに基づいた教育が行われた。末日聖徒の間では、多くの教会員が以前はプロテスタントであったため、グレートベースンに到着する以前からカートランド、ノーブー、ウィンタークォーターズ、英国において、散発的にプロテスタント方式に似た日曜学校が行われていた。

リチャード・バラントインが監督の許可を得て、ソルトレーク盆地で最初の日曜学校を開設したのは1849年の冬のことである。8歳から14歳までの50人の子供たちがバラントイン家に増設された専用の建物に集まった。集会所は後に第14ワードに移されている。ほかにも多くのワードで日曜学校は設立されたが、1857年にジョンストン軍が接近し、翌年に聖徒たちは南部に追われたため、閉鎖されることになる。

1864年、ヨーロッパ伝道部部長会の任務を終えて帰国したジョージ・Q・キャノン長老は、シオンに住む人々に福音を教える機会が不足していると感じた。彼は後にこう述べている。「ここにいる子供たちの人数を考えたとき、わたしは可能な限りの時間を使って子供たちに福音の原則を教えたいという燃えるような気持ちを感じました。」⁴ そしてキャノン長老は第14ワードの日曜学校を復活させた。これを契機にソルトレーク・シティーの他のワードでも日曜学校が設立されることとなった。

キャノン長老は1866年の初めに『ジュブナイル・インストラクター』（*Juvenile Instructor*）を個人的に発刊している。子供の大会、毎週日曜日の集会、聖典にまつわる読み物、宗教教育などがおもな内容だった。当時はテキストがほとんどない状態だったため、日曜学校で使用する格好の資料となった。『ジュブナイル・インストラクター』は「日曜学校の運営に心を砕いていた人たちにとって心強い味方となった。」⁵ この隔週誌は全日曜学校のために刊行されていたにもかかわらず、キャノン長老個人の裁量にゆだねられていた。教会の管理下に移されたのは、1900年になってからのことである。

1867年11月、日曜学校を恒久的な組織にする動きが開始された。まずヤング大管長が地方の多くの指導者に対して、シオンの若人の教育に関する熱い思いを打ち明けた。ジョージ・Q・キャノン長老が新しい中央組織の会長に選ばれ、各地ですでに組織されていた日曜学校の統一を図り、全教会に日曜学校を設立するよう呼びかけることになった。1872年に「デゼレト日曜学校連盟」が正式名称として採択され、日曜学校で働く人々の「連盟集会」が毎月第1月曜日に開かれることになった。年々青少年の生徒の数が増えていった。（当時は成人クラスは設けられていなかった。）このようにして、日曜学校での教え方と運営方法が統一された。初期の日曜学校では時間厳守、福音に関する大切な事柄を暗記すること、力強く賛美歌を歌うことな

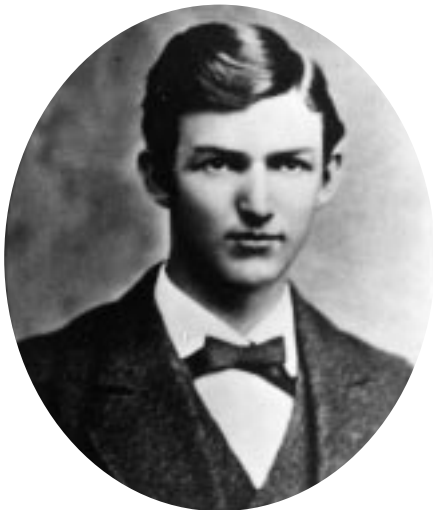


ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間



マリー・イザベラ・ホーン（1818 - 1906年）は1836年7月カナダにおいてバーリー・P・ブラットにより改宗し、聖徒たちが受けた試練の多くを彼女も体験した。マリーはミズーリ州ファーウェストで家を追われ、ノーブーで家を捨て、大平原を横断してソルトレーク盆地に到着した。

マリーは1842年に組織された扶助協会の最初の会員の一人である。彼女はソルトレークステーキでステーキ扶助協会会長を30年間務めた。1880年に中央扶助協会管理会に召された後、亡くなるまで同職にあった。ホーン姉妹は15人の子供の母親である。



ジュニアス・F・ウエルズ（1854 - 1930年）はソルトレーク・シティで生まれ、青年男子相互発達協会の組織化に参画したほか、13年間『コントリビューター』の編集に携わった。1872年から74年までは英国へ、1875年から76年までは合衆国東部へと2度の伝道を経験している。1921年ウエルズ兄弟は教会歴史記録者補助として支持された。

どが特に強調されていた。

1874年の夏、デゼレト日曜学校連盟は準州全域で50年祭（イスラエル民族がカナンに入った年から起算して50年ごとの祭）を実施した。プロボでは6月15日、ヤング大管長と副管長の教えを聞くために5,000人が集まったが、その4分の3は子供だった。この集会では子供たちもプログラムに参加している。歌の発表、聖句の暗唱、笑い話など、すべて地域の子供が発表した。ソルトレーク・シティで行われた50年祭では1,200ドルの収益を上げている。この資金は日曜学校の歌集や資料を購入するために使用された。

教会の青年女子の組織は、鉄道の敷設とともに流入した異邦人社会から聖徒を守るためにヤング大管長が提唱した計画の一部として発足した。1869年11月28日、ヤング大管長は自分の娘たちを集めて、シオンの女性の責任について話した後、娘たちによる「儉約協会」を組織させた。娘たちはこの「儉約協会」の下であらゆるぜいたくな習慣を改め、衣類や食料を節約し、無駄話をなくすことを決意した。またこの協会では福音の原則に関する指導を行った。これは若い男性が神権活動で受ける訓練に倣ったものである。

儉約協会は1870年末までにソルトレーク・シティのほとんどのワードで定着した。その後エライザ・R・スノーとマリー・イザベラ・ホーンが他の地域の定住地を巡ってグループの結成に努めた。各グループでは経済面、文化面におけるあらゆる実質的な活動を実施した。その後ヤング大管長は青年男子相互発達協会（YMMIA）が組織されたのを機会に、儉約協会を青年女子相互発達協会（YLMIA）と改称したいとする意向を表明したが、名称の変更は1878年まで実施されなかった。

ユタにはそれまで青年男子のための文学研究組織や討論研修会が幾つか存在していたが、1875年にヤング大管長は青年男子のための統一組織を教会内に結成するよう要望した。預言者は彼らが知的、霊的に発達し、適切な指導監督の下でレクリエーションを行う機会を設けたいと考えていた。そこで大管長は副管長ダニエル・H・ウエルズの息子で21歳のジュニアス・F・ウエルズを召して、最初にソルトレーク・シティ、続いて準州全域で青年男子相互発達協会を組織させた。最初の青年男子相互発達協会の集会は第13ワードの集会所で行われ、エドウィン・D・ウーリー監督の息子ヘンリー・A・ウーリーが会長に選ばれた。ヘンリーはブリガム・ヤング大管長の息子B・モリス・ヤングを第一副会長に、ジェデダイア・M・グラントの息子ヒーバー・J・グラントを第二副会長に選んだ。その後の数か月間に100を超える青年男子の組織が誕生している。

1876年には青年男子相互発達協会の中央管理会が組織され、各地で実施されているレクリエーションプログラムと学習コースの統一を図った。青年男子相互発達協会は教会の多くの青年男子の人生に力強い影響を与えることになった。青年男子相互発達協会は1879年から『コントリビューター』（Contributor）という名称で定期出版物を刊行した。この機関誌はその名称が示すように、青年男子からの寄稿による記事を幾つか掲載した。

1877年、ファーマントンワードのジョン・W・ヘス監督はワードの母親たちを集め、子供たちを正しく教育する責任について話し合った。ヘス監督は「子供たちを導く責任は専ら母親にある」⁹と考えていた。

時満ちる時代の教会歴史

献身的で思慮深い末日聖徒であったオーレリア・スペンサー・ロジャーズはヘス監督の言葉を真剣に受け止め、何度も祈った結果、「会員たちには各年代ごとに補助組織が設けられています。彼らは何を行い、時間を正しく使うにはどうすべきかをここで学んでいます。けれども、子供たちにはそうした機会が与えられていません」という声を聞いた。ヘス監督は子供のために組織を作りたいというロジャーズ姉妹の考えに心を動かされた。監督はロジャーズ姉妹の提案と彼女が靈感を受けたことについて大管長会に報告し、どのように対処すべきかを尋ねてみることにした。この打診を受けた大管長会はエライザ・Ｒ・スノーに、ファーマントンで開かれる補助組織大会に出席してロジャーズ姉妹と話し合うように指示した。⁷



リン・フォーセットが壁画として描いた最初の初等協会。1941年11月24日、十二使徒定員会のチャールズ・Ａ・カリスにより奉献された。この壁画は現在、ユタ州ファーマントンのロックチャペルにある。

ブリガム・ヤング大管長から女性の補助組織を監督する責任を受けていたエライザ・Ｒ・スノーは、1878年の夏、扶助協会と青年女子の大会に出席するためにファーマントンを訪れた。ロジャーズ姉妹は、エライザ・Ｒ・スノーに対して「子供たちを道徳的、霊的に啓発し、成長させるためにもっと何かをしてほしいと訴えた。」⁸

エライザ・Ｒ・スノーはソルトレーク・シティーに戻るとジョン・テラー会長に会い、子供のための組織を設けること、また週に1度、日曜日以外の日に集会を開くことについて承認を取り付けた。そこでスノー姉妹はヘス監督にあてて手紙を書き、ロジャーズ姉妹がユタのファーマントンにおいて初等協会を組織し、管理することについてテラー会長から承認を得たことを伝えた。

こうしてロジャーズ姉妹は最初の初等協会を組織した。彼女は1878年8月11日にまず子供たちの両親を集め、新しい組織の重要性について説明している。8月25日の日曜日、ロジャーズ姉妹はファーマントンワードにおいて初等協会を発足させた。まず子供たちを年齢別グループに分け、各グループの最年長者をクラス委員に任命した。そして子供たちに対して、両親と教師に従順であるように、またお互いに親切にするようにという内容の話をした。

初等協会が定住地の間に広まったのを受けて、エライザ・Ｒ・スノーは各地の初等協会に出席して、預言者ジョセフ・スミスが始めた大きな運動の中で一人一人が重要な役割を果たしていることを子供たちに伝えている。彼女は持参した預言者ジョセフ・スミスの時計を見せ、手に触れさせて、預言者の時計を手を持ったことを決して忘れないようにと述べている。⁹



オーレリア・スペンサー・ロジャーズ（18334 - 1922年）。オーレリアが12歳のとき、母親のキャサリンはアイオワのシュガークリークの野営地で死亡した。数か月後、ウィンタークォーターズでの仮住まいが完成したとき、父オーソンはヨーロッパ伝道部の部長として召された。2年後にオーレリアは5人の兄弟姉妹とともに大平原を横断し、ソルトレーク・シティーに到着して定住した。父親がソルトレーク・シティーに帰還して子供たちと再会したのは1849年9月のことである。

オーレリアは17歳でトーマス・ロジャーズと結婚し、ユタのファーマントンに転居した。そこで10人の子供を育てる傍ら、様々な分野で活躍した。初等協会の創設者であったオーレリアは、1893年から死去するまで初等協会の中央管理会で働いた。オーレリアは1895年にジョージアで開かれた婦人参政権会議および同年ワシントンD.C.で開かれた全国婦人会議にユタを代表して参加した。

教育問題

ユタにおける異邦人と聖徒のあつれきが高じて教育の危機にまで発展していたため、教会は青少年の教育についてどのような役割を果たすべきかを再検討する必要が出てきた。入植した当初の聖徒たちは各ワードに小学校を設立するためにあらゆる努力を払った。これらの小学校は私立の形態を取っていたため、教師の給料は授業料で賄われていた。ユタに鉄道が敷設されて異邦人の流入が急増すると、今度は「地区学校」の運営方法について教会と政府官吏の間で意見の食い違いが出てきた。異邦人は地区学校においてモルモンの教えを採り上げることに反対し、またすべての学校を税金で賄い、教会の支配下から引き離すべきだと主張した。

この論争は別の面に飛び火することとなり、1870年代に至って大きな騒動に発展した。国内の多くの地域の学校と同様、ユタの学校では読み方のテキストとして『聖書』を使用していた。ところが連邦政府の役人は公立の学校では『聖書』を使用すること、宗教的な事柄を教えることを禁止すると通告してきた。ヤング大管長はこれに対して、たとえ他のキリスト教社会がごぞって学校から『聖書』を排除したとしても、モルモンは追従しないと声明した。ユタの他の宗教の指導者たちも、『聖書』を基本にして学校教育における人格形成を行うという考え方を取っていたため、『聖書』の排除には反対した。こうした動きによって、教会の主張は支持を得ることになった。

国内に世俗的な勢力が増大しているという認識に立った教会指導者はデゼレト大学を強化することと、末日聖徒の他の定住地にもデゼレト大学の分校を設けることを検討し始めた。ワレンおよびウィルソン・デュセンベリー兄弟は1869年にプロボで学校を開設し、運営していた。1870年に至って教会と準州の教育担当官吏はデュセンベリー兄弟に対してプロボの学校を大学の分校とするよう勧めた。そして4月にデュセンベリー学校はデゼレト大学のティンパノゴス分校として再発足し、一般の学問と宗教教育の双方を教科課程に組み入れた。

ブリガム・ヤングは教育に熱心に取り組んでいたソルトレーク市長アブラハム・O・スムートに対して、プロボへ移住するよう指示した。スムートはプロボへ移住すると、ステーキ会長、地域社会の指導者として働く傍ら、デゼレト大学のプロボ分校の後援活動に従事した。しかしながら、スムート会長の支援にもかかわらず、分校は経済的危機に陥ってしまった。このためヤング大管長は1875年に、スムート会長、ユタ郡のおもだった5人の男性、さらに女流作家であり教師であったマーサ・ジェーン・ノウルトン・コレイを分校の信託理事に任命した。この任命は公正証書に付され、校名もブリガム・ヤング・アカデミーと改められた。学内における宗教教育を徹底させるために、「ブリガム・ヤングは『アカデミー内において「旧新約聖書」「モルモン書」「教義と聖約」が読まれ、その教えが学生に浸透するようにしなければならない』との指示を文書で通達している。そして数週間後ワレン・N・デュセンベリーが初代学長に任命された。」¹⁰

1876年、ドイツにおいて教育界で豊富な経験を積んでいたカール・G・メーザーはブリガム・ヤング・アカデミーの校長職を引き継いだ。メーザーは同職を皮切りに教会教育制度において目覚ましい活躍を遂げることになる。彼は後に教会が経営す

時満ちる時代の教会歴史



ブリガム・ヤングはアカデミーを設立するに当たって、各アカデミーで信託理事会の少なくとも一人は女性を登用するよう要求した。マーサ・ジェーン・ノウルトン・コレイ（1821 - 1881年）は、現在ブリガム・ヤング大学となっているブリガム・ヤング・アカデミーの信託理事会において最初的女性理事に選ばれた人物である。

マーサ・コレイは12人の子供を持つ母親であり、鉱石の分析技師、ハーブ学者、教会職員、多作の作家、学校教師を職業とした多才な女性である。研究分野も地質学、地理学、政治学、化学、聖書研究と幅広い。

るすべての学校を管理する責任を受けている。発足当時は小規模だったこの学校はやがて大きく発展し、20世紀にはブリガム・ヤング大学と改称されている。

1877年、ローガンに2番目のアカデミー、ブリガム・ヤング・カレッジが開設された。この大学は1926年まで運営された後、廃校となり、校舎はローガン市に移管された。続いて3番目のアカデミーとして計画されたのが、ソルトレーク・シティのソルトレークステーク・アカデミーである。しかし、このアカデミーは1886年まで開校されなかった。校名も何度か変更され、最終的にLDSカレッジ（末日聖徒単科大学）に落ち着いた。この大学は経済恐慌のさなか、1931年に正式に閉鎖された。その後教員たちが経営学を中心とする単科大学を自主運営によって継続したが、後に教会に経営権が移され、名称もLDSビジネスカレッジと変更された。

以上3つのアカデミーは、幅広い文科系教育、高度の道德規範、聖典を中心とした宗教教育を実施することにより、ブリガム・ヤングが教育に対して抱いていた理想を実現している。これらの教育機関は（通常の）教員養成講座も併設し、以後様々な定住地で設立された20以上に及ぶアカデミーの先駆者的な役割を果たすとともに、19世紀後期から20世紀初頭にかけて教会における教育の模範的存在となった。

将来を見据える

ブリガム・ヤングはその生涯の最後の10年間を、入植による末日聖徒国家の拡大、伝道活動と移民の推進に努力を傾注した。ヤング大管長が生涯を閉じるころには、モルモンの入植者はアリゾナに定着し、伝道事業はメキシコ共和国まで広げられていた。

宣教師から福音を聞いて改宗した人々が続々とユタ準州に移民して来たため、教会指導者は新しい入植地を常に見つけなければならなかった。早くも1850年代の初頭に、教会の探検隊がアリゾナに入ったが、砂漠地帯特有の水不足、広大なコロラド川を境とする南側の地域に関する情報不足、さらにインディアンとの襲撃により、1850年代と1860年代には入植を果たすことができなかった。1870年になって、政府は1865年以来ユタ南部の入植地に襲撃を繰り返していたナバホ族をようやく制圧した。この制圧によってユタのカナブからアリゾナのコロラド川畔にあるリーズフェリーまでの道が確保された。事実これがきっかけとなって入植が大きく進展したのである。

1872年から1873年にかけての冬を迎えるころ、ブリガム・ヤングは聖徒たちの長年の友人であったトーマス・L・ケインと妻のエリザベスを誘い、セントジョージに向かった。ヤング大管長はメキシコのソノーラバレーを聖徒の集合地とする計画をこの旅の間に考えている。アリゾナの定住地はユタとメキシコをつなぐ中継地とする構想であった。

アリゾナへの入植は相変わらず困難を極めた。このため1873年の初春にヤング大管長はアリゾナ偵察隊と呼ばれた14人の隊員で構成される2番目の探検隊を、コロラド川の南部に位置するリトルコロラド川地域、リオベルデ郡、サンフランシスコ山脈地域に派遣した。この第2探検隊も険しい道と乾燥した気候に前進を阻まれ、意気消沈してしまった。しかしながらブリガム・ヤングのアリゾナ入植の決意はいささかも鈍ることがなかった。1874年から1875年にかけて別の偵察隊が派遣され地域の

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間



カール・G・メーザー(1828 - 1901年)は教会の教育分野における第一人者の一人に数えられる。ドイツで生まれ育ち、教育を修めた。ドイツで教鞭を執っていたとき、宣教師に会い、1855年エルベ川においてフランクリン・D・リチャーズ長老からバプテスマを受けた。バプテスマ後、二人は異言の賜物と異言の解釈の賜物によって話を交わしている。

メーザー兄弟がアメリカに渡ったのは1857年だったが、ユタに移ったのは1860年になってからである。彼は1864年にブリガム・ヤングの家族の個人的な家庭教師をしている。大管長会は1888年にメーザー兄弟を教会が経営する学校の初代管理者に召した。

探索が行われた。

1876年初頭に大管長会は200人の「宣教師」を召し、ロト・スミス、ジェシー・O・バレンガー、ジョージ・レイク、ウィリアム・C・アレンを団長とする4つのグループに振り分けた。そしてこの4つの入植団は年末までにリトルコロラドの渓谷にやっとの思いで定着を果たしている。アリゾナに定着したこれらの人々は、水を確保するためにその後長い年月をかけてダムを建設するなどの苦労を重ねている。1880年には別の入植団がリトルコロラド川の支流であるシルバークリーク沿いの川上およびアリゾナ中央部メサに近い地点に定着した。入植に成功して建設した集落に、スノーフレイクがある。これは入植を奨励した十二使徒定員会のエラスタス・スノー長老と入植団の指導者ウィリアム・J・フレイクの名を取って命名したものである。

アリゾナの入植地では生きていくことだけでも精いっぱいであったため、メキシコまで南下する試みはすぐには実行されなかった。しかしながら、メキシコへ宣教師を派遣することを望んでいたブリガム・ヤングは1875年、メキシコ・アメリカ戦争中にメキシコで参戦したダニエル・ウェブスター・ジョーンズを派遣団団長に任命するとともに、『モルモン書』をスペイン語に翻訳する召しを与えた。これは当初の計画にはなかったことだが、ジョーンズ長老は教会に入って間もないスペイン人のメリトン・G・トレホをこの事業に加えることにした。トレホの話によれば彼はロッキー山間地方に住む主の民を探し求めるようにとの靈感を受けたとのことであった。こうして年末にはジョーンズ長老、トレホ長老ほか4名がメキシコへ旅立った。国境を越えたのは1876年1月である。様々な他宗派の牧師から妨害を加えられたが、これらの宣教師は人々を集めて集会を開き、メキシコ全土の100を超える集落の指導者に500枚の『モルモン書』から抜粋した聖句(Selected Passages of the *Book of Mormon*)を送った。

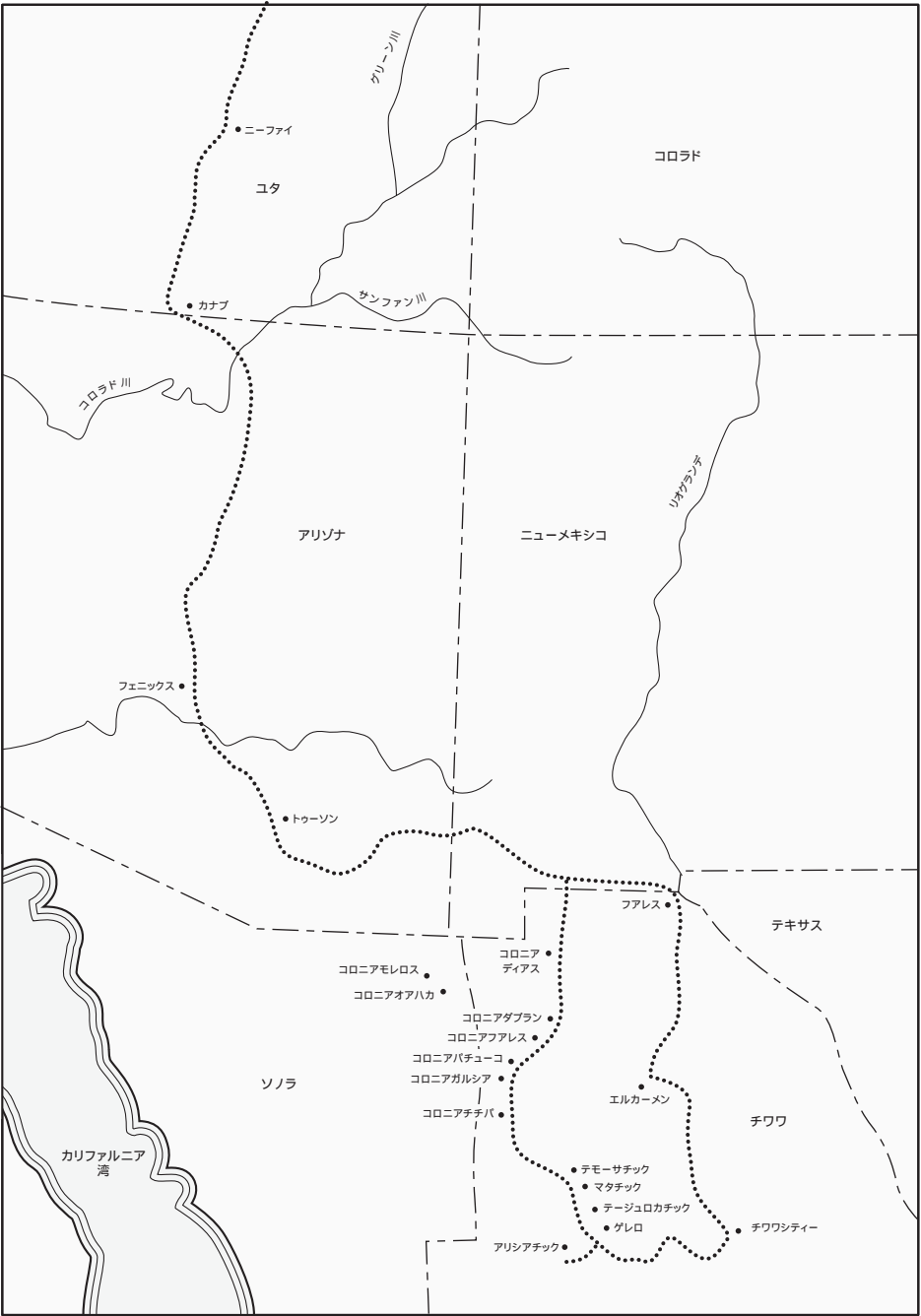
宣教師たちは将来教会員が入植するのに適していると考えたチワワ州地域にも足を伸ばした。1876年の秋に、トレホ長老とヒラマン・プラット長老はソノーラ州で伝道している。1879年に十二使徒定員会のモーゼス・サッチャー長老が宣教師の団を率いてメキシコ・シティーに入り、この地に教会の揺るぎない基礎を築くことに成功している。

1870年代全体を通じて、英国諸島とスカンジナビアから膨大な数の改宗者が引きも切らずに移民して来た。ヨーロッパの聖徒はシオンに集合するために、永続的移住基金を利用し、チャーターした船に乗って米国に渡るという従来からのパターンが毎年繰り返された。1869年に、教会は大西洋の横断にそれまで利用していた帆船に代えて蒸気船を利用するようになった。またこの時期には大陸横断鉄道が完成していたため、ユタまでの陸路は容易になっていた。鉄道が敷設されるまでは約5か月を要していた旅が、3週間足らずに短縮された。しかし、費用はほとんど変わらなかった。

1872年から1873年にかけて第一副管長ジョージ・A・スミスは教会指導者で構成される使節団を率いてヨーロッパとパレスチナに向かった。これは福音を宣伝する機会を探ることと、ユダヤ人の帰還に備えて聖地を再度奉献することが目的であった。オーソン・ハイドは1840年から1841年にかけて同様の任務を果たしたが、そのときは単身で赴いている。聖徒たちは続々と西部の新シオンに集合していたが、中

時満ちる時代の教会歴史

この地図は1875年から1976年にかけてメキシコ北部を訪れた最初のモルモン探検隊と宣教師の一行が取ったルートを示している。19世紀、メキシコに8つの居留地を開拓した。



央幹部の兄弟たちはユダヤ人のパレスチナ再集合についても教会が並々ならぬ関心を持っていることを再度宣言する必要があると感じていた。一行はヨーロッパ各地を歴訪し、1873年3月2日、スミス副管長と十二使徒のロレンゾ・スノー長老の二人がオリブ山において奉献の祈りをささげた。¹¹

セントジョージ神殿

ブリガム・ヤング大管長は生涯最後の10年間で、「山間に住む」聖徒たちのために神殿を建設したいという思いの実現に心血を注いだ。ソルトレイク・シティーのテンプルスクウェアに建設されたエンダウメントハウスは1855年以降一時的な聖なる場所としての役割を果たし、多くの末日聖徒がそこで神殿の儀式を受けていたが、

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

恒久的な建物はまだ存在していなかった。ブリガム・ヤングは1847年にソルトレーク神殿の建設場所を明らかにしていたが、建築に着手したのは1853年になってからである。しかし、合衆国軍の接近と、この圧力によって1857年から1858年にかけて多くの聖徒が南部へ移動しなければならなかったことが大きく影響して、建設計画は深刻な遅れを来していた。1860年代と1870年代のソルトレーク神殿の建設はそのためにはかばかしい進捗を見せていない。しかしながら、石切場となったテンブルスクウェアでは100人を超す職人がリトルコットンウッド・キャニオンから運ばれた花崗岩^{かこう}を切断する光景が見られた。

西部で最初に完成した神殿はセントジョージ神殿である。セントジョージは、ヤング大管長が晩年何回かの冬をセントジョージで過ごしたため第2の教会本部と呼ばれた。聖なる建物の敷地としてヤング大管長がこの地を奉献したのは1871年11月のことである。地元の聖徒たちは、預言者の励ましにこたえて、ユタ北部から集められた職人の助けを得ながら建築を急いだ。必要な石を確保するために砂岩採石所が開かれた。材木は一部、南ユタのパインバレーとアリゾナ北部のカイバブフォレストから運ばれたが、ほとんどは130キロ離れたアリゾナのマウントランブルで伐採し、運び込まれた。多くの聖徒が、建築に従事する人たちのために食料と衣料を寄付した。また「什分の一労働」として10日につき1日を現場で働く聖徒もいた。

ヤング大管長は以前から地元の産業振興に力を注いでいたため、神殿と神殿の内部は周辺地域で入手できる材料が使用された。例えば、神殿のカーペットはプロボの毛織物工場が製造し、祭壇と説教壇のふさ飾りは扶助協会が生産した絹を使用した。構造部分が1877年に完成し、神殿の各部屋が1月に奉献された。同年の年次総大会はセントジョージで開催されることが決定され、大会行事の一環として神殿全体が奉献された。時に1877年4月6日であった。奉献の祈りを朗読したのは、ダニエル・H・ウエルズであった。

ヤング大管長は1877年に、神殿の儀式に関連した別の重要な面で大きな貢献を果たしている。死者のための業が効率的に進められるように、聖なる神権のエンダウメントを正しい様式に記述する作業を他の教会指導者たちとともにに行った。ヤング大管長は神殿における説教で次のように述べている。「もしわたしたちの父祖が墓の中から話すことができるとしたら、何と言うのでしょうか。こう言うのではないのでしょうか。『わたしたちは牢獄^{ろうこく}に何千年もの間とどめ置かれ、この神権時代が来るのを待たされてきました。この牢獄で汚れた者たちと一緒に縛られ拘束されてきました』と。死者はわたしたちの耳に何かをささやくのでしょうか。いや、もし彼らにその力があるとするならば、天の雷の音をもってわたしたちの耳に叫ぶことでしょう。』¹²

ヤング大管長は十二使徒定員会のウィルフォード・ウッドラフをセントジョージ神殿の神殿長に召し、死者のための儀式に本格的に取り組むよう指示した。死者のための最初のエンダウメントが執行されたのはこの神殿である。ヤング大管長は同年、ユタのローガンとマンタイでさらに2か所を神殿用地として奉献した。

ウッドラフ長老は直ちに任務の遂行に取りかかった。「彼は、生者と死者のための神殿の儀式に身も心もささげた。」¹³ 彼は死者のための儀式も執り行ったが、その多くは自分の親族だった。ウッドラフ長老は1877年9月にソルトレーク・シティーで行った自分の職務に関する報告の中で次のように述べている。「過去1,800年間、この世

時満ちる時代の教会歴史

セントジョージ神殿は教会歴史上特別な位置を占めている。1877年1月11日、この神殿において初めて、死者のためのエンダウメントが執行されたからである。生者のためのエンダウメントはこれ以前にソルトレーク・シティーのエンダウメントハウスで行われていたが、ヤング大管長は死者のための儀式には神殿が必要であると説いていた。老い、健康状態が悪化していたヤング大管長は、セントジョージ神殿の完成を非常に気にかけていた。

ブリガム・ヤングは自ら、自分の親族のための儀式を指揮するとともに、神殿の儀式執行者に教える「エンダウメントの完全な様式」を作成した。1877年3月末までに、3,208人の死者にエンダウメントが執行された。完成前のこの写真から、砂岩造りの下半分は、清さと光を象徴するために白石灰塗料で上塗りする準備の段階であることが分かる。塔は後に落雷により損傷したため、さらに高い塔に代えられている。



に生まれ死んでいった人々は霊界に行くまで、靈感を受けた人の声を聞くことも、福音の教えを耳にすることも決してありませんでした。肉体を持つだれかが彼らのために儀式を執行して贖わなければなりません。霊の状態にある彼らは自分たちのためにこの儀式を執行できないからです。」そしてこう宣言した。「主はわたしたちの心を揺り動かし、そして死者に関する多くの事柄を明らかにされました。……死者はあなたがたの後を追って、あなたがたに要求することでしょう。セントジョージにおいてまさにこのことが起きているからです。死者はわたしたちが彼らを贖う鍵と力を持っていることを知っているので、我々を訪ねて来ることでしょう。」

ウィルフォード・ウッドラフは続いて、2日2晩にわたって独立宣言の起草者たちが彼に現れ、彼らは合衆国政府を興し、現在も神に忠実であるのになぜ儀式を施してくれないのかと尋ねたことを明らかにした。ウッドラフ長老は直ちにJ・D・T・マカリスターの手により彼らのためにバプテスマを受け、さらにジョン・ウエスレー、クリストファー・コロンブスなど50人近くの著名な人々のためにバプテスマを受けた。ウッドラフ長老は次にマカリスター兄弟を身代わりとして、「3人（マーティン・バン・ビューレン、ジェームズ・ブキャナン、ユリシーズ・S・グラント）を除くすべての合衆国大統領にバプテスマを施した。この3人については、彼らの申し立てが正当とされたときに、だれかが彼らのために儀式を執行するだろう。」¹⁴ これら3人のための儀式は最終的にヒーパー・J・グラント大管長が管理する時代に執行された。

神権組織の改革

^{よわい} 齢を重ねるに従って務めを果たす能力が減退してきたこと、またそう長くは生きられないことを自覚していたブリガム・ヤングは、晩年に神権指導者ならびに組織

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

182	When Born	Where Born	When Died	Where Died
Name of the Head	1826	Conn	1894	Conn
George Washington				
Augustine Washington				
Dr. Washington, John & Augustus				
Laurence Washington				
David Park Cordis	1826	Conn	1894	Conn
John Park Cordis				
James Madison	1826	Conn	1894	Conn
James Monroe	1826	Conn	1894	Conn
John Quincy Adams	1826	Conn	1894	Conn
Andrew Jackson	1826	Conn	1894	Conn
William Henry Harrison	1826	Conn	1894	Conn
John Tyler	1826	Conn	1894	Conn
James Knox Polk	1826	Conn	1894	Conn
Franklin Pierce	1826	Conn	1894	Conn
Abraham Lincoln	1826	Conn	1894	Conn
Andrew Johnson	1826	Conn	1894	Conn
William McKinley	1826	Conn	1894	Conn
Joseph Hooker	1826	Conn	1894	Conn
John Bull	1826	Conn	1894	Conn
William Brewster	1826	Conn	1894	Conn

教会の貴重な文書の一つ。これはセントジョージ神殿の記録で、故人となっていた合衆国歴代大統領と独立宣言の起草者、その他歴史上著名な人々のために執行された儀式の詳細が記されている。

に関して幾つかの重要な変更を実施している。1873年に彼は教会信託保管人をはじめとする教会の幾つかの実務職から退き、ジョージ・A・スミス第一副管長の管理の下に12名の信託保管人を指名して実務を担当させた。また、ロレンゾ・スノー、ブリガム・ヤング・ジュニア、アルバート・カリントン、ジョン・W・ヤング、ジョージ・Q・キャノンの5人を副管長として追加した。

十二使徒定員会の先任順位もヤング大管長により訂正されている。ウィルフォード・ウッドラフはジョン・テラーよりも年長であったことが理由でジョン・テラーよりも先任として何年もの間聖徒の支持を受けてきたが、1861年の10月総大会においてジョン・テラーの次位に支持された。ヤング大管長は十二使徒の先任順位を聖任の日付に基づいて決定すべきことを確認し、これによって先に聖任されていたジョン・テラーが定員会においてウィルフォード・ウッドラフよりも先任となったのである。1875年の4月総大会ではさらに、ジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフがオーソン・ハイドとオーソン・ブラットよりも先任使徒となった。オーソン・ハイド兄弟とオーソン・ブラット兄弟は不従順のかどにより定員会から一時除名されていた。この二人が教会から離反していた間に、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・アルバート・スミス（ジョージ・アルバート・スミスは1875年に大管長会で働く召しを受けたため、十二使徒定員会の一員としては支持されなかった）は、使徒職に聖任された。オーソン・ハイドとオーソン・ブラットは復権したとき、定員会における以前の地位を与えられた。しかしヤング大管長は、継続して職を務めることも先任順位を決定する要因となると説明して、この件を訂正している。¹⁵

1876年にヤング大管長はシオンのステーキ相互の関係を明確にしている。ソルト
レークステーキは「中心地のステーキ」として他のステーキに勝るものではなく、

時満ちる時代の教会歴史

すべてのステークは平等であり、相互に自主独立していると言明した。1877年当時、使徒の半数以上がステーク会長として働いていた。しかし、彼らは中央指導者としての役割に専念できるように、ステーク会長を解任された。¹⁶

ブリガム・ヤングは1877年に全ステークにおける主要な神権組織の人事を刷新し、改革を実施した。ほとんどすべてのステークで新しいステーク会長会が召され、またステークの数も13から20に増加した。¹⁷ 地方レベルでの指導責任を明確にするため、「1877年7月11日付け大管長会通達」とその後の書信によって、すべての監督会は3人の大祭司で構成されるべきこと、監督はこの世的な必要を世話する責任に加えて各ワードの管理大祭司としての務めを果たすべきことが指示された。さらに、監督は新たに神殿建築献金を集める責任を課され、またアロン神権定員会を管理する責任を持つことが改めて確認された。

多くの若い男性がアロン神権定員会に召されて訓練を受けるべきであり、長老定員会は、たとえ幾つかのワードにまたがって定員会を組織することになっても、96人の長老で構成されるべきであり、七十人は伝道のみに専念しなければならないことが指示された。大祭司はステーク定員会であって、ワード単位では集会を持たない。ステーク会長は、四半期ごとに大会を開き、また毎月神権会集会を開催しなければならない。神権指導者は各ワードにおいて安息日の集会、日曜学校、青年男子相互発達協会、青年女子相互発達協会が開かれるよう見届ける責任がある。¹⁸ 神権組織におけるこれらの改革はブリガム・ヤングの記念碑ともいうべきものである。この決定はヤング大管長が地上における主の預言者として行った最後の偉業であると考えられている。

ブリガム・ヤングの不滅の貢献

ブリガム・ヤングは最後まで教会の諸業務と密接なかかわりを持ち続けた。列を成して押し寄せる来客に対しては、従来と変わりなく対応した。1877年8月23日、77歳の預言者はカウンスルハウスに集まった監督を指導したが、集会を終えた後、猛烈的な腹痛と吐きけに襲われた。4人の医師の努力と全教会員の断食と祈りのかいなく、ヤング大管長は1877年8月29日に他界した。娘のジーナによると、ヤング大管長の「最後の言葉は『ジョセフ、ジョセフ、ジョセフ』でした。父のこうごうしい顔から察するに、最愛の友、預言者ジョセフ・スミスと話をしていたのだと思います。」¹⁹ ブリガム・ヤングの遺体はタバナクルに安置されて公開され、2万5,000人が弔問したと考えられている。葬儀ではジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ダニエル・H・ウエルズ、ジョージ・Q・キャノンなどが弔辞を述べている。キャノン長老の以下の弔辞には、主の力強い預言者が果たした貢献が端的に要約されている。

「ヤング大管長は末日聖徒イエス・キリスト教会の全聖徒の頭であり、目であり、口であり、手でありました。この教会の組織にかかわる重大な問題から日常業務に関するささいなことに至るまで、彼の偉大さはその一つ一つに表れています。教会の組織化、神殿の建設、タバナクルの建設、臨時州政府と準州政府の設立から、今日わたしたちが座っているいすの形状などの細かいことに至るまで、これらすべてと準州内のあらゆる定住地にヤング大管長の才能を見ることができます。ヤング大管長にとっては、関心を向けるに足りないささいなことは存在しませんでした。ま

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

た大きすぎるために逃げ出すようなことも存在しませんでした。」²⁰

ブリガム・ヤングの末日聖徒イエス・キリスト教会大管長在任期間は歴代大管長の中で最も長い。ヤング大管長の果たした貢献は数限りなく、また多岐にわたっている。今日の教会で慈しまれ、尊敬され、定着している多くの事柄の起源をさかのぼっていくとヤング大管長の行った貢献と指導力にたどり着く。ブリガム・ヤングは彼の師であり友である預言者ジョセフ・スミスの指導にただ従っただけだと考えていた。ヤング大管長は次のように述べている「わたしは預言者ジョセフ・スミスを生年知っていることを考えると、一日中でもハレルヤと叫びたい気持ちになります。ジョセフ・スミスは主が立てて聖任された預言者であり、地上における神の王国を築いて維持する鍵と力をお与えになった預言者です。」²¹ また別の機会に次のように述べた。「わたしが主から与えられたものは、ジョセフ・スミスを通して受けました。ジョセフ・スミスは主の用向きを伝えました。もしわたしがジョセフをないがしろにするとすれば、それは使徒の時代以来だれも明らかにせず、宣言せず、説明しなかったこれらの原則をないがしろにすることになるに違いありません。」²²

ブリガム・ヤングが残した最大の遺産の一つに、レクリエーション、事業、管理、教育の面において、教会を異邦人社会から独立させた指導力を挙げることができる。歴史家が教会を指してロッキー山間に築かれた聖徒の巨大な王国であると言うとき、それはブリガム・ヤングに対する賛辞の意味合いが込められている。政府軍と政府官吏の妨害、砂漠式気候と荒涼とした未開地、末日聖徒に敵対する商人、この世的な流行、大陸横断鉄道の敷設、ユタにおける貴金属の発見など、これらが大きな障害となって立ち足はだかの中で聖徒の王国の建設は行われたのである。

ブリガム・ヤングは民を率いて次々と危険な事業を成し遂げた。1838年から1839年にかけて、彼は十二使徒会の指導的立場に立つ者として、迫害のただ中であつた聖徒たちを組織してミズーリから脱出させた後、イリノイに避難地を確保した。さらにヤング会長はノーブーから聖徒たちを率いてアイオワ平原を横断し、ウィンタークォーターズ、そしてグレートソルトレークまで導いた。1848年から1852年までの間に彼はアイオワの野营地から数千人の聖徒を集合させて西部の拠点まで導いた。次にブリガム・ヤングは英国とヨーロッパで誕生した数万人の改宗者に目を転じ、永続的移住基金を設立した。この組織化された移民方式は、アメリカ史上最も優れたものであったとされている。ヤング大管長は入植団を農業を中心とする集落に振り分けるため、ユタ、アイダホ、ワイオミング、ネバダ、アリゾナ、コロラドに約350か所の用地を確保した。

ヤング大管長は、苦難が待ち受ける新天地を征服するために、聖徒が互いに協力することの重要性を教えた。この精神は今日まで全世界の教会で豊かに受け継がれている。ヤング大管長は先頭に立って、地上の多くの国々に福音を広め、至高者なる神に神殿を建設した。彼は靈感によって、民の間に消費組合を築き、共同制度を実施した。ブリガム・ヤングは末日聖徒に対して教義と、生活に関するあらゆる事柄について指示を与えた。彼の説教は記録されているだけでも800を超えるが、テーマは実に多様である。神の属性に始まって、悪魔の力、自分の救いを達成する必要性、神権の原則、家族生活と結婚生活における行動様式、女性のファッション、自分の持ち物を清潔にし整理することまでに及んでいる。20世紀に入ってから、ジョ



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

合衆国政府は各州に対して、ワシントンD.C.の国立彫刻ホールに展示するため、州で最も著名な人物1名ないし2名の彫像を提供するよう要請した。ユタ州は1950年、マホンライ・M・ヤング作のブリガム・ヤングの彫像を寄贈した。ジョージ・アルバート・スミス大管長が寄贈式に出席し、奉獻の祈りをささげた。現在の彫像は国家首都庁舎に移されている。

時満ちる時代の教会歴史

ン・A・ウィットソーはブリガム・ヤングの教えを編集して、今や教会の古典の仲間入りをしている『ブリガム・ヤング説教集』(*Discourses of Brigham Young*) を出版している。ブリガム・ヤングは教会員に対して一般の教育と霊的な教育を受けるよう強く求めた。この教育面における遺産は、今日に至るまで聖徒の祝福となっている。

ブリガム・ヤングは生前からあらゆる教会員に忘れ去ることのできない感銘を与えてきた。柔和で謙遜な人々には優しい心で接し、傲慢で偏屈な人々には猛々しさをむき出しにした。寄る辺ない人々が苦しむのを見ては涙を流し、虐げられた人々を引き取っては世話をする人だった。ヤング大管長は教会の標準を破った人々に対して忍耐を示し、人々の話に耳を傾け、ユーモアのセンスを持ち、演劇やダンスを愛した。しかし政治指導者としての彼は抜け目のない一面も持ち合わせていた。ヤング大管長は、不屈の精神の持ち主であり、決して優柔不断なところなかった。ヤング大管長の霊性は、彼の祈り、神殿事業、病人の癒しに表されている。長く多彩な人生の随所に、主が命じられたことを行うためのあらゆる指導力が発揮されている。

注

1. “Woman’s Exponent: A Utah Ladies’ Journal” *Woman’s Exponent* 「女流解説者：ユタ女性誌」『ウーマンズ・エクスポネント』1872年6月1日付，8

2. “Home Affairs” 「家事」『ウーマンズ・エクスポネント』1877年8月1日付，36 - 37

3. アンドリュー・ジェンソン，*Latter-day Saint Biographical Encyclopedia* 『末日聖徒人名辞典』全4巻（Salt Lake City: Publishers Press, 1901 - 36），1：705で引用

4. Conference Report 『大会報告』1899年10月，88で引用

5. *Jubilee History of Latter-day Saints Sunday Schools*, 1849 - 1899 『末日聖徒の日曜学校における50年祭史』1849年 - 1899年（Salt Lake City: Deseret Sunday School Union, 1900），14

6. オーレリア・スペンサー・ロジャーズ，*Life Sketches of Orson Spencer and Others, and History of Primary Work* 『オーソン・スペンサー他の人物描写と初等協会設立の足取り』（Salt Lake City: George Q. Cannon and Sons Co., 1898），206 - 207

7. クララ・リチャーズ，*Insights of Early Farmington History* 『ファーマントンの初期の歴史観察』（Bountiful, Utah: Horizon Publishers, n.d.），15

8. *Eliza R. Snow, an Immortal* 『不滅の人エライザ・R・スノー』（Salt Lake City: Nicholas G. Morgan, Sr., Foundation, 1957），40

9. オーレリア・S・ロジャーズ『人物描写』205 - 217，221 - 222；Farmington Ward, Davis Stake, Primary Minutes Book, 1878 - 88，デービスステーク，ファーマントンワード初等協会議事録，1878年 - 1888年，1878年8月11日付，1 - 4；1878年8月25日付，5，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティ；エライザ・R・スノー・スミス，*Sketch of My Life* 『わたしの人生描写』末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティ，38 - 39；キャロル・コーンウォール・マドセン，スーザン・ステイカー・オーマン共著，*Sisters and Little Saints* 『姉妹と小さな聖徒たち』（Salt Lake City: Deseret Book Co., 1979），1 - 13参照

10. アーネスト・L・ウィルキンソン，W・クレオン・スコーセン共著，*Brigham Young University: A school of Destiny* 『ブリガム・ヤング大学：宿命を持った学校』（Provo: Brigham Young University Press, 1976），48 - 49

11. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻（Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930），5：474 - 475参照

12. *Journal of Discourses* 『説教集』18：304で引用

13. マサイアス・F・カウリー，*Wilford Woodruff: History of His Life and Labors* 『ウィルフォード・ウッドラフの生涯と努力の歴

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

史』(Salt Lake City: Bookcraft, 1964), 495

14. 『説教集』19: 228 - 229で引用; 『大会報告』1898年4月, 89 - 90も参照

15. ジョン・テラー, *Succession in the Priesthood* 『神権の継承』1881年10月7日, 神権会, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 16 - 17; *Deseret News* 『デゼレトニューズ』1875年4月14日付, 168

16. ウィリアム・G・ハートリー “The Priesthood Reorganization of 1877: Brigham Young's Last Achievement” *Brigham Young University Studies* 「1877年神権組織の改革: ブリガム・ヤングの最後の偉業」『ブリガム・ヤング大学紀要』1979年秋季号, 5参照

17. ハートリー 「1877年神権組織の改革」3, 34 - 35参照

18. ハートリー 「1877年神権組織の改革」20 - 21参照

19. スーザ・ヤング・ゲイツ, リー・D・ウィッツォー共著, *The Life Story of Brigham Young* 『ブリガム・ヤングの生涯』(New York: Macmillan Co., 1930), 362で引用

20. ゲイツ, ウィッツォー 『ブリガム・ヤングの生涯』364で引用

21. 『説教集』3: 51で引用

22. 『説教集』6: 279で引用